

草笛の歌

杉本宜子

昭和十四年

田植えを待つばかりの水田が、青い空を映して鏡のように光っていた。十一、二歳くらいの村の女の子たちが数人集まってにぎやかに遊んでいる。

「多恵ちゃんダメよ、足がないんだから乗れないでしょ？」

親戚からもらったのだという中古の自転車を自慢げに見せびらかしながら、むつ子はそう言った。言ってしまったから「しまった！」と思ったのか、彼女はバツの悪い顔をして、自転車のハンドルをくるっと左に切った。そしてそのまま車輪を転がしながら前方へと走っていった。

一緒に遊んでいた女の子たちもむつ子に続いた。彼女の自転車を貸してほしかったのだ。それでも女の子たちは多恵にはすまないと思っただけか、後に残された友をみな代わる代わる振り返っては遠ざかっていった。

残された三村多恵はただ呆然としていた。彼女には左の足首から先がなかったのだ。足をなくしたのは彼女がまだ赤ん坊のころの火傷がもとだった。不幸はいくつかの事情が重なって起きてしまった。両親や祖父母たちは五体満足で生まれながら、大人の不注意で片足のない子にしてしまった多恵の将来を思い、悔いてもくやみきれなかった。それもあって彼女は父親や祖父母に大切に育てられた。

多恵は小学校に上がると同時に松葉杖を手放し義足をつけることになった。初めは杖なしではおっかなびっくり立ち上がりにも戸惑っていた多恵だった。しかし義足に慣れると、今度は限らない喜びを身体いっぱいを感じるのだった。学校の階段も人の手を借りずに上り下りができるようになったし、それまでは松葉杖をつくためにふさがっていた手が、彼女のさまざまな用を果たしてくれるようになった。

義足は多恵を変えた。身体は縄を解かれたように自由に動かせるようになった。それは彼女がこれまでにまったく味わったことのない身体だけではなく心の開放だった。といっても、もちろん制約はあった。いぜんとして体育の授業は見学のままだったし、運動会も席は変わらず見学席だった。

それでも義足をつけたことよって多恵は新天地へと踏み出したことには違いなかった。それまで家に閉じこもりがちだった彼女は外に飛び出した。土の匂いをかぎ、蝶とたわむれ風が林を渡ってゆく音を聞いた。そしては友達を得て遊び、本の貸し借りをして、子供らしく「おままごと遊び」にも加わった。

多恵はちよつと気が強く負けずらいところがあつた。学校の成績は常にトップをキープしていつもはつらつとしていた。そしてつづらな瞳のキラキラ光る美少女へと成長していったのだった。そんな多恵を初めて見たものは、彼女が身体に障害をもっているのほとんど気づかなかつた。

多恵自身もそうだった。自分に片足がないのをさほど悔いることも引け目を感じることもなく成長していた、この瞬間までは。だからむつ子の、「多恵ちゃんは大メよ、足がないんだから……」という言葉は多恵の心臓に刃をつきたてた。

むつ子はなにもウソを言ったわけではなかった。子供は率直なだけ残酷なことをする。それだけに多恵に与えた傷は深かった。むつ子は多恵の心の奥にあった劣等感を、無意識のうちに白日のもとに引きずり出したのである。いや劣等感などという生易しいありきたりな表現は適当ではないだろう。この日をさかいに、多恵の苦悩の日々が始まった。

多恵はよくお乳を飲んでよく眠る健康な赤ん坊だった。彼女が生後六ヶ月だった。寒い冬のある日、母親の咲子は単身赴任で都会で働く父親の代わりに、村の会合に出かけなければならなかった。初めは多恵を負ぶって行くつもりだったが、あまりにも健やかに寝入る娘の顔を見ながら迷っていた。外は吹雪で寒かった。

そうこうするうちに、母屋から多恵の従姉になる二人の姉妹が遊びにやってきた。七歳と五歳のこの二人は常から多恵をかわいがり、奪い合うようにしてかわるがわる抱くのだった。

それはいつもの風景だった。咲子の中をひとつの思いがよぎった。（会合はさほど長引かないだろう。従姉の姉妹に目を覚ました後の多恵の守りを頼もう）、と。二人は案の定、上機嫌でこの咲子の頼みを引き受けた。

多恵には一人の兄と二人の姉がいた。兄の良一はまだ学校から戻っていなかった。どこかで道草でもしているのだろう。彼でもいればもつと心強いのだがと思いつつも、まだ手のかかるなかの娘二人を連れて咲子は家を後にしたのだった。

事故は咲子が出た間もなく起こったのかもしれない。いや、しばらく後、多恵が目を覚ました後のことかもしれない。姉妹は咲子たちを笑顔で送り出した後、多恵の寝入る布団の中にもぐりこみ赤ん坊を奪いあい、なにかのはずみで豆炭コタツをひっくり返してしまったのではあるまいか。

咲子が村の会合から帰ってきたとき、姉妹はいなかった。子守りにも飽きて母屋に戻ったのだろうと彼女は思った。幸い多恵はぐずりもせず母親の帰りを待っていた。だが咲子がお乳を与えようと多恵にかけられた布団をめくったとき、目を疑うような光景が映しだされたのだった。

多恵を包んだ毛布が豆炭の灰で汚れていた。気づいて咲子は驚愕した。暖をとっていた豆炭が何がしの激しい動きでひっくり返ったに違いなかった。その火の粉が飛び散ったのだ。姉妹が多恵の布団にもぐりこみ、赤子を奪い合って遊んだときにこうなったのではあるまいか。うかつであった。姉妹を過信しすぎたのだ。

咲子はもどかしげに毛布をはぎ取った。そして幼子の身体に火傷がないかと目をさらさるようにして見た。たしかに左足が赤かった。だが、真っ赤になるとか水ぶくれができていくというわけではなかった。この時点では誰も多恵の足が蒸し焼き状態になっているのに気づかなかった。さらに悪いことが重なった。

せめてこの時、多恵が痛がり火がついたように泣いてくれたら、いえ、せめてぐずりつづけてくれたら、大人たちは急ぎ病院にかけこんだことだろう。だが彼女は普段と変わらない機嫌を見せてくれたのだった。そのために母親は大事には至らないだろうと、素人判

断をしてしまったのだった。

それでも咲子は多恵の足を冷たい水で冷やしたり、火傷によく効くという薬草をすり鉢ですって、それを小さな足にしみこませた。だが赤い腫れは四日たっても五日たってもまったく変化を見せなかった。咲子は不安にかられた。その彼女が病院に多恵を連れて行ったときは、村で一軒しかない病院ではろくな治療を受けることができなかった。医師は首を傾け、難しい顔を隠さなかった。すでに手の施しようがなかった。手遅れだったのである。なんの因果だろう、無垢な赤子に将来に及んでかせられた十字架はあまりにもむごく重かった。

多恵は自転車の一件があつてからは物憂い時間をすごすようになっていった。以前のように屈託なく友だちと遊ぶこともめつきり少なくなつた。心の中ではいつも自分に左の足がないのに引け目を感じるようになった。それだけではない、漠然とした将来への不安を抱え込むようになっていった。彼女はそんなとき、自分の足首を見ながら恨めしく思うのだつた。(どうして? どうしてわたしには足がなくなつてしまったの!)、出口のない暗闇の中で多恵は唇をかんだ。

しかし彼女は誰を恨めばいいのか分からなかつた。幼い従姉のしたことは血肉のエゴが被いかぶってしまった。多恵自身が事態を天命と受け入れるには彼女はまだ幼く、それになつた事情を誰もていねいに説明してはくれなかつた。みな、辛すぎて自然口を閉ざしてしまふのだつた。ただ母親は多恵の左足をさすりながら、時折、「ごめんね、ごめんね」と泣いた。そして彼女は仏壇の前に長く座ることが多かつた。そのわけを多恵は、年齢が長ずるとともに少しずつ理解していったのだつた。

そんな彼女はある日ひとつの大きな喜びごとを見出したのだつた。それは家の土蔵の中にあつた。土蔵には普段は使わない季節の建具や火鉢、茶器や母親が嫁入りの時に持参したダンスや長持ち、家族の晴れの日を飾った古い衣装などがしまわれていた。そんな中に多恵は父親が若いころ読んだのだという童話や小説を探し出して何気なく一ページを開いた。暗い土蔵の中、小さな窓から差し込むわずかな日差しの下で、彼女は読書にのめりこんでいった。時間のすぎるのも忘れて。

多恵の家は代々が農家だつた。だが父親の三村正一郎は新聞記者だつた。田畑は祖父母と母屋の伯父夫婦、そして母親の咲子が守り、正一郎は一人都会に赴任していた。多恵の読書好きは父親から受け継いだものだったのかもしれない。彼は当時から出版された小説などはことごとく手にしていたのだつた。やがて多恵は父親が読み終えるのを今か今かと待ちわびるようになるのだつた。

昭和十五年のある日

三村正一郎は休日を利用して家に帰つてきた。彼は妻に会社から中国の大連への派遣を言い渡されたのを告げた。政情の不安な時期だつた。田舎にいても人々の間では、日本は大国アメリカを相手に戦争を起すのではないかとささやかれていた。中国内ではすでに満州事変や盧溝橋事件が起きており、散発的に日本と中国は戦争状態になつていた。

咲子は思い切つて言った。

「中国行きは断るわけにはいきませんか、断つてもし会社を辞めさせられたところで、

うちは農家ですから、今すぐ食べることに困るといふことはないですよ。でもいま中国へなんか……もし、戦争にでも巻き込まれたらどうしますか？」

「いや、会社は強制しているわけではないんだ。たしかにうちは、食べることに困らないだろう。けど、多恵のことを考えると金が必要だ。義足は身体の成長に合わせて新しく作り変えてやらねばならん。それにわしらが死んだあとも、あれが一人で生きてゆけるように親としてできるだけのことはしてやりたい。海外特派員になると給料はかなりよくなる」

この夫の言葉を聞いて咲子はなにも言えなかった。あの冬の日、村の会合に多恵を負ぶって行けばよかったと何度歯がみしたことだろう。眠れない血をかくような苦しい日々がつづいた。後悔してもし切れなかった。それだけにこの不穏な時期の夫の海外赴任は、自分の責任のように咲子は心が切り裂かれる思いがした。幸多かれと願いをこめて多恵と名づけた娘は、なんの因果か重い十字架を背負わされてしまったのだ。

昭和二十年、十五年におよぶ長い戦争は終わった。

十七歳になった多恵は洋裁学校に通い縫い子になっていた。勉強と読書好きで負けず嫌いの多恵は女学校に進みたかった。しかし親たちは彼女が将来一人でも生計を立てて生きてゆけるようにと、手に職をつけるのを強くすすめたのだった。

「結婚」という二文字が頭になかったわけではなかった。しかし身体に障害を持つ彼女には女学校を優秀な成績で出たところで、いい就職も平凡な縁談を得るという選択肢もなかった。彼女がそれをどんなに渴望したところで現実が受け入れなかつただろう。色々な意味で区別が差別につながってそれが当たり前の古い時代だった。

それでも彼女は持ち前の勝気な気性から、弱音は吐かず他人には決して涙をみせなかった。彼女はプライドの高さからハンデのあることさえ、めつたに自分から他人にもらすことはなかった。

そして多恵は二十三歳になった。ある大きな洋装店の腕のいいお針子になっていた。彼女の仕事は客の間で評判がよかった。仕事の一つ一つが丁寧で、仕立てた洋服は見栄えがした。どんな生地質のものでも彼女の手にかかると、はたから見ていると造作なくみえるのだった。

ある日、隣の町から一人の青年が多恵の仕事場へ足を踏み入れた。名前は佐倉道夫といった。彼の父親もまた同じような洋装店を営んでいた。道夫の父親と多恵が勤める洋装店の社長とは友人関係だった。そんなこともあって、普通なら決して見せない裏方までを道夫は見せてもらっていた。

佐倉道夫は好青年だった。背はすらりと高く、男にしては細面の目鼻立ちの整った顔をしていた。彼はなにを伝授されているのか、現場の支配人からあれこれ話を聞かされていた。どんな話しているのか内容は多恵たち縫子には聞こえなかったが、女性ばかりの仕事場は道夫の出現でちよっと色めきたった。

彼はときどき、縫子の間を通り抜けながら作業に見入ることがあった。そんなとき、若い縫子たちは道夫を意識して、固くなったたり緊張したりした。だが道夫の方は仕事と割り切っているのだろう、そんな女性たちの自分を意識するのにはあまり気づいていない様子

だった。

そして何日かして道夫が多恵のそばに来て彼女の仕事を見つめていた。多恵は仕事に入ると没頭するタイプだった。まわりの動きには無頓着で自分一人の世界に浸りきる。だから道夫が話しかけるまで、彼がそばにいることすら気づかなかった。

「ビロードですね、他の生地比べて難しいと思うのですが、縫う時はどういう点に気をつけているのですか？」

多恵はその声に驚いて顔を上げた。道夫は熱心にミシンを踏む多恵の、手の下のビロード地に目を落としていた。いやその手さばきに。彼は腰をやや落としていたので驚いて顔を上げた多恵の頭と危うくぶつかりそうになった。

「ああ、失礼」、と言いながら道夫は姿勢を正した。多恵は恐縮しながら無言で頭を下げた。二人の視線が微妙に絡み合った。そして道夫の目はビロード地と多恵の顔とを交互に見つめた。ふわりとした柔らかい空気が二人の間に漂った。

「はい、毛足が長い生地なのでミシンをかけるときとても難しいです。半返しでしつけをするとき、縫ったあとに生じる上下間の生地の誤差をあらかじめ頭の中で計算しておきながら、この押さえ金を上げたり下げたり微妙に調節しながら一気に縫い上げてしまします。失敗が許されないので、神経を使います」

と、多恵は調節レバーを指差しながら答えた。道夫はなるほどというような顔つきをした。それから彼は二、三、多恵に質問した。

その日の夕方、多恵は同僚たちに遅れて一人職場を後にした。別に特別なことはなにもなかった一日だったが、多恵の心はうきうきしていた。彼女はそのわけを知っていた。道夫だった。彼と交わした会話の一つ一つが、時間がだいたいすぎたこんなときになっても彼女の心を熱くしているのだ。柔らかい声、優しい眼差し、多恵が答える言葉の一つ一つに丁寧な相づちをうってくれる熱心さ。

これまで多恵は男性と親しく話を交わすことも、ましてや一緒にどこかへ出かけるということもなかった。時代的にもそれらはタブー視された。そして職場は女性ばかりだった。支配人や社長は男性だったが、彼らは多恵たち若い女性からしたら特別な存在ではあったが、意識する異性たちではなかった。

多恵は一人そっと思った。（これはもしかしたら恋かしら？）と。しかし、彼女はすぐ頭を振った。たとえそうだとしてもどうにもならない。自分は結婚できる身体じゃないんだからと。でも一人、道夫を思うことは自由だ。だれにも打ち明けないけれど、そう、自分ひとりの胸に秘めた恋、「片想い」でもいい、多恵はそう思い定めると、かえって心が軽くなった。

葡萄色に染まった西かたの空は、陽は傾いてしまったがまだまぶしいほどに明るかった。多恵はそっと深呼吸をした。内側からなにかしら新しいエネルギーがわいてくるようなそんな嬉しい気分になるのだった。

そのとき、彼女の肩を軽く叩く人がいた。振り返った多恵の顔は笑っていた。先ほどの嬉しい気分をまだ残していたからだ。しかし笑顔は一瞬こわばった。意外だった。多恵が振り向いた先に立っていたのは道夫だったのである。

道夫の顔も笑っていたが、心持ち緊張しているようでもあった。彼は

「急いで帰らなければいけませんか？ お話したいことがあるのですが」

と言う。

彼は支配人にも聞いたのか、多恵の名前を知っていた。そして道夫は、自分は多恵に好意を持っていると自身の気持ちをストリートに伝えたのだった。はにかみながら、多恵が仕事に打ち込む姿が美しいと言った。そしてそのあなたの横顔がいつも顔を離れないとも。さらに彼は結婚を前提にして付き合っしてほしいと申し出た。道夫の目は真剣だった。

予想もしていなかった彼の言葉や申し出に多恵は驚いた。恐ろしくさえあった。それが素直に顔に出た。道夫はそんな多恵に自分の唐突な申し出が彼女を驚かせたことを詫びた。そして返事は急がないから考えてほしいと言った。一週間したら会いにくるので、そのときに返事を聞かせてほしいと言って道夫は去った。

多恵は汽車の揺れに放心状態で身を任せていた。頭の中は空っぽだった。暮れなずむ田園風景の中に、ぼつりぼつりと家の灯りが見えた。あれらの家の中では女房たちが夕餉の仕度に取りかかっているのだろう、多恵はいつしかぼんやりした頭でそんな光景を思い描いていた。

夫は勤め先からもどりくつろいで新聞でも読んでいるだろう。子供たちは腹をすかせて夕飯を待ちかねていることだろう。母親は遊んだ後片付けをしない子供たちを叱りつけて、忙しそうにかまどの火加減などを見ているだろうか。多恵の目にうつすらと涙がにじんできた。なぜならそれらは自分には、いつまでたつても回ってきはない女の幸せだからだ。夫と呼べる男性などできるはずがないのだから……

多恵はこれまでは他人の家庭の生活模様など思い描いてみることもなかったし、関心もなかった。すべては縁のないことだと思っていたからである。

そんなことを思っていると、彼女の中に突如として母親の咲子に対する激しい憎しみがこみ上げてきた。(どうして、どうしてこんな身体に……母親があの日、自分を家に置き去りにしないで村の会合に連れて行って欲しかったなら、あんな火傷を負わずにすんだものを、そうすれば、わたしはいまごろは普通の幸せを当たり前に受けることができたのだ。道夫の愛にだって……)。そんな思いが彼女の胸いっぱい広がった。

彼女にも分かっていたのだ、母親の懊悩を。多恵の今日の不幸を招いたのは自分だと咲子は日夜仏壇に手を合わせて、多恵やご先祖さんに詫びているのを。しかしいくら詫びてもらったところでそれがなんになるう……誰にでもあるわけではない過酷な青春を、多恵はどう生きていいのかいまだ分からない。

その苦しみが今度は道夫の出現であからさまになった。彼の眼差しは真剣だった。多恵は偽りのない道夫の心を感じた。それだけにつらく切なかった。自分には縁のないものと諦めていた恋の道と幸せが予想もしない形で突然やってきたのだった。

彼女は夢想した。もし、自分が道夫と結婚できたらどんなに幸せだろうと。そうなら、自分もあるだけの愛情を道夫に注ぐだろう。そればかりではない、彼の父親が経営する洋装店はやがて道夫が継ぐことになるだろう。そうすれば、自分の洋裁の技術を生かし彼の仕事を助けてやることができる。道夫の優しい笑顔が目に見えただ。彼は微笑みながら多恵に手を差し伸べていた。

「ガタン」、汽車が連結分部で大きく揺れ、多恵は思わず前のめりになりそうになった。彼女の夢想は消えた。「結婚」、そんなことはありえなかった。辛い現実を直視しなければならなかった。自分は普通の身体ではないのだ。多分、いえ、明らかに道夫はその

事実を知らない。椅子に腰掛けてミシンを踏んでいる姿からは、彼女が足が不自由だとはうかがい知れない。知れば、彼は後ずさりするだろう。足がないといったって生まれつきのものではない。生まれてくる子供に遺伝の心配などないが、問題はそんなことではないのだ。

事実を知れば彼の両親はもちろん、自分の両親もこの話には反対するだろうと思えた。多恵の家からしたら良縁であるには違いなかったが、「釣り合はぬは不縁のもと」といい、両親は辞退するのだろう。

そうなると、自分が普通の身体ではないことを道夫に知られてしまう。そうなったらあの優しい笑顔はどう変わってしまうのだろうか。考えるだけで恐ろしかった。変貌した道夫の姿を目の当たりにするのは耐えられなかった。

恋愛も結婚もまるで現実味がなかったときは、「諦め」という念が心にそれなりの平穩をもたらしていた。これまでも心ひそかに思った男性はいた。しかしそのどれも多恵にはおとぎ話の域だった。

しかしいま事態は一変した。道夫という男性に愛を告白されたのだ。多恵は身体の中に生身の女が息づくのを覚えた。自然の摂理からいえばしごく当然な心の動きが、身体に伝わったのだ。

彼女の肉体の奥では心のたかまりとほぼ同じくらいに熱いうずきが潮のように、初めは静かにやがて狂おしく駆け巡った。しかしだからといってどうにかなるものではなかった。昇華のできない激しい思いが多恵を責めたてた。そんななかで彼女の選んだほんのささやかな望みは、せめて道夫に嫌われたくないということだった。

そのためには彼に事実を知られてはいけない。愛情のこもった言葉の余韻のあとで見せつけられる、道夫の失望した姿を目の当たりにすることも、彼の嫌悪、いや同情の眼差しさえもなんとしても避けたかった。なんにも知られず、彼からそつと遠ざかりたい。自分の心がこれ以上に傷つくのはイヤだ、多恵は必死にそう思った。

汽車から降りると、空には星がなくぼんやりした月が出ていた。生ぬるい風が多恵の頬をなでた。彼女は首にじつとりと張り付いた汗を無造作に手の甲でぬぐった。多恵は降ってわいたこの恋愛事情に一旦は冷静な判断を下した。しかしそうはいうものの感情はそう簡単に割り切れるものではなかった。

彼がもし結婚の返事を聞きにきたら断ろう、その意思は固かった。断りの理由はまたおいおい考えよう。理性がそう論している。だがそう思う後から道夫の情のあるやさしい声や、真面目そうな眼差しを思い出しては多恵の心を締めつけた。これまでは感じたことのないあやしい情熱が再び体の中にほとばしる。結婚に対する未練と、容赦のない現実のはざままで彼女の感情は激しく葛藤した。

多恵はどうしても、なぜ自分だけが身体障害という不幸に見舞われなければならないのかという強い憎しみを抱いた。

……なぜ、自分なのだ……他の誰かでもよかったのではないか。むつ子はどうか。勉強だって自分よりずっと不出来だし、器量だって悪い。たいした技能も持たないのにいち早く縁づいて、早くも一児をもうけたというではないか。どうして世の中はこんなに不公平なのだろう……

……兄の良一はどうか。同じ兄妹だ。ご先祖さんは兄弟の仲でなぜ自分を選んだのだら

う。でも考えると兄はダメだ、優しすぎる。もし兄が自分に代わろうものなら三村家の将来は絶えてしまうだろう。なら上の姉の光子はどうだ。しかし姉は気が弱すぎる、母さんに叱られたら口ごたえ一つできず泣いてばかりだ。それじゃ、小姉さんは？…：彼女もダメだ、体が弱い。すぐ風邪をひくしこじらせては喘息を引き起こす。そこへいくとわたしは身体も丈夫だし気も強い。母さんに対等にもものも言える。人さまの意地悪にも歯を食いしばって生きてきた…：なら、どうする。家族を犠牲にすることはできない。ならやはり自分が引き受けるしかないのか、家族の不幸を…：感情の整理のつかないままに多恵は家の玄関の引き戸を開けた。

咲子は今年の夏、孫に着せるつもりで赤い金魚の絵柄の浴衣を縫っていた。彼女は鼻まですり落ちた眼鏡越しに帰宅した娘を迎えた。いつもの茶の間の風景であるのにどうしたことか、このとき多恵の頭に母親に対する憎しみが再びこみ上がった。のん気に楽しそうに孫の浴衣など縫って、娘の苦しみなどよそごとに母は幸せに浸っているのか、と。彼女は怒りを抑えることができなかった。

「母さん、あなたは幸せだね、孫まで抱けて。わたしはどうなるの？ お嫁にもゆけやしない。自分の子供だって…：大きい姉さんも小姉さんも良いところに嫁にいったというのに…：二人の姉さんたちには嫁入り道具をたんとこしらえてやったでしょ。わたしの分は準備しているの？ もう満で二十三だよ。嫁入り仕度の着物一つ縫ってくれてないじゃない……」

咲子は多恵のいつもの激しい口調に、ただ呆然と娘の顔を見つめていた。何かあったのだ、母親は感づいたが、肝心なことにはふれなかった。そして

「あなたには、父さんがこの家の裏にあんたの家を建てるというから……」

「わたしは家なんかいらぬ、お嫁にゆきたいのよ！」

多恵は素晴らしい捨てる、乱暴に部屋を出て行った。咲子の胸に刃物がぐざりと食い込んだ。いままで多恵は嫁に行きたいなどと一度も口にしたことなどなかった。自分の身体の事情をのみこんでいてのことだったのだ。しかしそんな心のバランスを崩させるような大きな出来事が、この日、多恵の身に起こったのを咲子は知った。しかしいまさら自分になができようか、二十三年前のあの日に時計の針を巻き戻すことなどできはしない。できることなら自分の左足を切り取ってでも多恵の足に縫いつけてやりたいと何度思ったことだろう。血を吐くような眠れない夜がどれだけ続いたことか。今でも咲子は自分自身を許していなかった。

すべては自分の落ち度であった。多恵を家に置いたまま出かけたのも、いち早く医者にかからなかったのも。そして娘の自分を見る目にときどき毒が含まれているのも知っていた。しかし咲子はその視線を避けなかった。多恵には強い人間になってもらわなければならぬと母親は腹をくくっていたのだった。

咲子は再び縫い物を始めた、黙々と。もう涙は出なかった。これからも多恵が受けるだろう苦しみや嘆きを、共に、いえ、母親がゆえにそれ以上に背負ってゆかねばならない、彼女は多恵をまるごと受け止めなければならなかった。

多恵は次の日からことさら母親を避けて、食事も家族と一緒にとらなくなった。一人ひっそりと自分の部屋に運び込んですませるようになった。十日ほどすぎた。道夫はなにも言っただけでなかった。多恵がその日の朝出勤すると、支配人が彼女を呼び止めた。そして彼

は多恵の足元を見て

「あんた、分をわきまえなあかんよ」

と言った。多恵は思わず息をのんだ。彼が道夫のことを言っているのだと直感した。道夫があるいは彼の周囲の誰かが多恵の身の上について調べたのだろう。多恵は事実を隠したわけではわけではなかった。この縁談は自分の意思で断ろう、いえ辞退しようと心に決めていたことだった。しかしこんな形で裏切られようとは多恵は思いもしなかった。

多恵は全身から力が抜けていくのを感じた。すぐにでも家に飛んで帰りたいかった。しかしこの仕事場を失うわけにはいかない。辞めたらウワサがたつだろう。支配人は自分の立場を守るためにどんなことを職場で言いふらすか分からない。

ウワサ話とは事実とは関係なく、人のおせっかいや妬みが尾ひれをつけて、仲間内を無責任に行き交うのだろう。そうしたらだらしない女だ、色目を使って男をその気にさせたなどと言われかねない。そうすれば次の勤め口は見つからなくなる。

多恵は踏ん張った。(ここで負けたらだめになる)、この日の彼女はまるでハリネズミのように全身緊張していた。そして終業時間になった。残酷なものである、一時でも早くこの場を去りたいこんな日に限って、皮肉にも支配人が多恵に残業を依頼してきた。彼女にはこれを断る適当な理由がなかった。もともと仕事は手先の器用さを要するものだったので、多恵にしかできなかった。

仕事がほぼ終わりにかけたころだった。多恵の家から連絡が入り、母親が倒れたのですぐ帰れと言ってきた。命には別状はないが血を吐いたという。さすがに支配人は驚いて慌てた。

多恵は最終の九時半の列車に乗った。彼女の中にこの十日あまりの日々が去来した。母親にはひどい仕打ちをしたと思った。自分の心ない言葉や攻撃的な眼差しなどが母親を追い詰めたのだと多恵は自分を責めた。血を吐いたと聞いたとき一瞬自分の罪を悔いた。しかし命に別状はないと知らされたときは複雑な思いが巡った。もし母親がこのまま死んでしまったら残された自分はどうなるのかと不安に陥る反面、バチが当たったのだ、神様が母親に罰を下したのだと、意地悪い性が彼女を支配した。

夜汽車に揺られているうちに多恵の高ぶった感情もいつしか静かになった。すると今度は今朝方、支配人に言われた言葉が思い出されてくるのだった。「あんた、分をわきまえなあかんよ」という。屈辱的な言葉だった。事故に見舞われ足を失ったことが、なにか罪を犯したことにもなるのだろうか。自分から道夫に言い寄ったわけでもないのに。ここまで考えたとき、多恵はそれまでこらえていたものが堰を切ったようにこみ上げてきた。涙がとめどなくこぼれ落ちた。最終列車内は、彼女のほかに乗客はいなかった。多恵は思いつきり泣いた。

汽車を降りると、濃いビロードのような夜空には満天の星が輝いていた。多恵はその星空を見上げてじっと見つめてみた。星にも大粒のものもあり米粒にも満たない小さなものもあった。しかしそのどれも自分の光を持っていて精一杯輝いていた。何万光年ものかなたから。

彼女はこれまで、こんなにまじまじと天空を仰ぎ見たことはなかった。星たちは動き、生きてるようにさえ感じられるのだった。まるで自分になにかを語りかけているように感じられた。しかしかなたの星はあまりにも遠くにあった。

そして多恵は星明りの下をザックザックと歩き始めた。涙はもう乾いていた。彼女のなかで道夫の存在はすでに遠いものになりつつあった。しかし多恵はこのとき心のそこから寂しいと思った。だれかこの切ない心の内を分かってくれる人がほしいと思った。たくさんは要らない、一人でいいからそんな人がほしいと思うのだった。心から信頼できる友がほしいと。

駅から家まで歩いて多恵の足で三十分かかった。どれくらい歩いたころだろう、山の上で誰が吹くのか笛の音が聞こえてきた。音色は夜の闇を縫いながら嫋嫋と心に染み入るように悲しげに聞こえるのだった。それはいまの多恵の何ごとをもっても埋めがたい、心の深い空洞に響いた。

咲子は胃潰瘍だった。入院が必要だった。多恵は支配人にことわり何日か少し早めに仕事を終わらせてもらった。そして帰りに母親を病院に見舞った。やつれて弱々しくベッドに横たわっている咲子を見ると多恵は心が痛んだ。二人は深い話はなにもなかったが、相手の心の中が痛いほどよく分かるのだった。

咲子は厳しい母親だった。夫は単身赴任でほとんど家にはいなかった。彼女は農家の次男の嫁だったが、長男の嫁と同じく舅や姑に仕えて、田畑を守らなければならなかった。彼女は氣丈だった。

四人いるどの子にもしつけは平等に厳しかった。多恵が末っ子で足が不自由だからといって、彼女にだけ庭の草むしりや農繁期の田畑の手伝いや家事労働を勘弁してくれたりしなかった。もちろん、身に余る力仕事などは母親なりに考えて多恵に与えた。

祖父母はそんな咲子を厳しすぎるときどき叱ったが、彼女は自分の考えを通した。多恵はそんな母親に反抗的だった。多恵は幼いときからもっと母親に甘えたかったに違いない。咲子は咲子で自分たち親が死んだあとの多恵のことを心配した。独りででも生きてゆかなければならない娘に強い心を養ってほしかった。しかし血肉のエゴは言葉を省略した。だがこれは母娘の共通した性格からくるものだったのかもしれない。

多恵の父親、正一郎は農家の次男だった。家には耕す田畑はあったが、本人の希望で新聞記者として働いた。彼は昭和十五年から三年間を中国の大連で海外特派員として働いた。彼は厳しい戦時下に働く場所を定めながらも、家に戻ると優しい父親に徹した。多恵に対してはそれが特別だった。彼は国家に仕えるという使命感より、多恵の将来に備えて給料のいい前線での特派員としてのポジションに立った。

多恵は父親が好きだった。母親に甘える分も父親の広い胸の中で甘えた。正一郎は多恵が幼いころから本が好きだったのを知っており、戦時下でも手に入る小説などはできるだけ手を尽くし求めて多恵に与えた。多恵は歴史ものが好きだった。彼女が女学校に進みたいと言いついて聞かなかったとき、正一郎が娘を諭した。

多恵にもなぜ家族のみんなが、自分には女学校ではなくて洋裁学校に行くことを勧めるのか、その理由は十分に承知していた。冷静に考えれば、親兄弟の判断が正しいだろう。それが分からない年齢ではなかった。しかし、彼女の中に、（なぜ？ 自分だけが）、という反発心を抑えられなかった。

いやそれにもまして不自由な左足が、自分について回る不幸の根源のように思えて呪わしかった。（すべてにこれがついて回る！）、多恵はこの怒りをどこにぶつけていいのか分からなかった。彼女の空回る怒りを優しく包んでくれて、飲み込まなければならぬ

現実を論してくれたのが父親だったのである。

多恵が咲子の病室の前に立ったとき、中で人の話す声がした。誰か見舞いに来てくれていたようだった。大きな声の見舞い客だった。近くに住むおトメばあさんだった。話し声もれてきた。

「……咲子さん、あんた多恵ちゃんは嫁に出さんつもりかね、もう、二十三になったらろくに。器量よしだし、身体は丈夫だし、洋裁の腕前だって立派なもんだというじゃないか。そろそろ急がな、腹を決めたらどうだね」

「はい、でもこればかりは、ねー」

母親はおトメばあさんに押されぎみだった。おトメばあさんはこれまでも縁談をいくつもまとめてきたやり手だった。こういう問題は多少強引な方が仕事が速いと思っっているようである。

「あんたね、たらんもん同士って言葉があるんだよ。多恵ちゃんは足が悪い。同じように足の不自由な人だって手のない人だっているんだよ。お国のために戦った軍人さんだってそうさね。そんな男の人たちだって結婚したい人はいるのさ。どうだろ、ここは一つわたしに任せてくれないかしら、確かに多恵ちゃんは美人だ、でも、普通の結婚は無理だね……」

母親の返事は聞こえてこなかった。多恵はそっとドアの前を離れた。

「たらんもん同士」、この言葉が多恵の心臓を凍りつかせた。そして頭の中をこの言葉がぐるぐると回った。手のないセルロイドのキューピー、頭に包帯を巻いた兵隊の姿、小児麻痺を患ったのか松葉杖をついたいたいけな少年……そんな情景が次々に目に浮かんで消えていった。そして、（自分もおトメばあさんや健常人たちから見ればたらんもんなのだ、違うんだ）、そんな悲しみが胸の中にじわりとわいてきた。そして彼女に道夫との悲しい別れを思いださせた。やがて彼女は言いようのない屈辱感と寂寥感に、胸が押しつぶされそうになるのだった。

幼いころから学校の行き帰りや農繁期で顔をあわせたときなどは、気さくに声をかけてくれたり、重いものを一緒に持ってくれて、仕事を助けてくれたおトメばあさんの中では、多恵はたらんもんだったのだ。彼女はここでまた一つ痛い現実にぶつかった。これが社会というものなのか。おトメばあさんの言葉は道夫との別れの傷をさらに深めてしまった。

秋になり、数年前に嫁いだ二十七歳の長姉の光子に初めての赤ん坊が生まれる日が近づいてきた。遠くに嫁いだために里での出産は無理だった。咲子は農繁期のため家を離れることができなかった。次姉は嫁いですでに家にいなかった。そこで多恵が世話をしにゆくことになり、彼女は勤めをしばらく休むことにした。

久しぶりに見る姉、光子の顔は多恵には輝いて見えた。嫁いで三年すぎてようやく子室に恵まれたのだった。義兄が跡取り息子だったために、なかなか子のできない姉は婚家の手前肩身が狭かったらしい。それがほんの一年前までのことなのに、彼女はそれを遠い昔話のように語って多恵に聞かせるのだった。自分の子供を持つということが、女をそんなに幸せにするものなのかと、多恵は内心驚いた。

多恵は親元をこんなに長く離れるのは初めてだった。半月の予定だった。二十七歳の姉はもう子供の二、三人を生んでいてもおかしい歳ではなかったが、初めての出産は年齢には関係なく不安を覚えるものなのだと、多恵は光子を見ていてそう思った。姉妹として一つ屋根の下に暮らしたのが四年前だった。しかしその面影はうすくなっていた。大きく腹のせり出た、それでいてときにはうっとり幸せに酔っている光子は、もう一人の母親の顔を持っていた。

出産予定日をすぎても光子はなかなか産気づかなかった。義兄はサラリーマンだったが、彼も落ち着かない様子を残しながら毎朝出勤していった。近くに住んでいる光子の姑や親戚のおばさんたちも毎朝夕、顔をのぞかせては新しい生命の誕生を心待ちにしていた。

そうこうするうちに出産予定日を十日以上もすぎてしまった。まわりがやきもきする中で光子は生まれてくる赤ん坊のために悠長に編み物をしていた。ケープはすでに編み上げて、いまは靴下を編んでいた。多恵は編みあがった片方の靴下を手のひらにのせてみながら、そのあまりの小ささに首を傾げて、小さすぎやしないかと気をもんだ。

すると光子は微笑みながら

「赤ちゃんの手足って小さいのよ、ほら、もみじのような、ってよく人が言うでしょ」

と言った。そしてもう片方が編みあがりそれが多恵に手渡された。彼女はそれを両手にのせていとおしそうにながめいった。まだ男の子か女の子か分からないので毛糸の色は白だった。

「まるで森の妖精がはくみたいね」

「そうね、赤ちゃんは妖精かもしれないわね」

姉妹はそんな会話をした。多恵に不思議な気持ちがあわてきた。姉は村でも美人と評判だった。姉に似ればきつときれいな可愛らしい赤ん坊がうまれてくるのだろう。その赤ん坊は自分とも血がつながっている。無事に生まれてくれるだろうか、そう考えると、この新しい命の誕生はにわか多恵の心をざわめかせた。喜びと不安が一緒になって彼女の心を揺さぶるのだった。

そして次の日の昼過ぎに光子は急に産気づいた。苦しむ姉をその場に残して多恵はすぐ光子の婚家に走った。あいにく誰もいなかった。さいわい産婆の家も近かったので、多恵はそのまま産婆（助産婦）の家に駆け込んだ。産婆はヨネさんといい、歳は六十を回っているという。腰も少し曲がっていた。二十年もこの仕事をしていて、取り上げた赤ん坊は百人を超えているというのが彼女の自慢の一つだった。ヨネさんはお茶を飲んでいた。慌てふためいて飛び込んできた多恵を見て、「あい、分かった。すぐ行くでな」といいながらなかなか腰を上げない。

しびれを切らした多恵はヨネさんを残したまま再び光子のもとに帰った。光子は苦しがつていた。多恵はどうしていいのかわからなかった。光子はときどきうめき声をもらしながら、横にした身体をえびのようにくの字に曲げて「痛い痛い！」を連発した。そしてときどき天井を見て、「ふー！」と大きな息をついてあえぐのだった。

ヨネさんがきた。二時間も三時間も待ったように時間が長く感じられたが、多恵が腕時計をみると実際には三十分もかかっていなかった。ヨネはどれどれと光子を仰向けに寝か

せて内診した。そして痛みは何分おきにくるかね、と訊ねた。光子は分からないと答えていた。そしてしばらくようすを見ていた。

「うーん、まだまだじゃな。痛みの間隔が一分おきになったらまたわたしを呼びにおいで。そうだな、今晚、生まれるかな？ 明日の朝かな？ 湯を沸かす準備だけはしておきなさいよ」

そう言って心細がる多恵を残してヨネは帰っていった。こんな急な日にかぎって光子の義母はどこに行っているのか、帰ってこなかった。それから、光子は額といわず顔にも玉の汗をかき全身も汗まみれになりながらうめき痛がり、ときには気の弱いことを言った。

「多恵ちゃん、わたし、無事に産み落とすことができるのかしら、その前に死んでしまうんじゃないかしら」、などと。

初めのうちは多恵も光子の悲鳴や痛がり苦しむさまを見て、ただおろおろするばかりだった。しかしヨネは帰り際に、多恵の背中をなでながら「大丈夫じゃー、あんたらのお母ちゃんもみんな、こげん、死ぬ苦しみを耐えて子供をこの世に産み落としているんじゃないかな」と、笑った。多恵はその言葉に勇気をもらった。

ヨネが診たてたように光子はその晩遅く女の子を産んだ。母子とも健康で光子の産後の日だちもよかった。美保と名づけられた赤ん坊は一週間もすぎると、黒々とした髪の毛に丸い目の可愛らしい顔立ちになってきた。普通これくらいの赤ん坊は赤い顔にまだしわを残したままなのだが、二週間近くも遅れて生まれた美保は、母親のおなかの中でその過程を終えてしまったのかもしれない。

多恵は来る日も来る日も飽くことなく美保に見入っていた。目を追うごとに目鼻立ちが整ってゆく赤ん坊は母親の光子よりも妹の多恵に似ているように見えた。光子も義兄もそう言って、血の不思議を笑った。

多恵の帰る日が近づいてきた。多恵は美保があくびをしたりくしゃみをしたりする一つ一つの動作に、大げさなくらいに感動していた。そして光子に言った。

「いつそのこと、美保ちゃんを連れて帰りたいくらいよ。赤ちゃんって不思議、こんなに小さいのに、もう人間として生きる機能のすべてをそなえているなんて」

光子は笑顔で聞いていた。彼女は多恵が幼いころから読書が好きで、人一倍感受性の強いのを知っていた。姉は妹が置かれた過酷な運命に一度として無心で通り過ぎたことはなかったが、しかし、その内面にどう立ち入っているのかもまた分からなかった。でも、妹ももう二十三歳になった。結婚適齢期がすぎようとしていた。安易に結婚を勧めようとは思わなかったが、かといって女としての幸せをむざむざと逃がしてしまうのはあまりにも可哀そうに思えた。

「多恵ちゃん、多恵ちゃんだって結婚してこんな可愛い子を産むことだってできるのよ。あなたの気持ちしだいよ」

「結婚？ たらんもん同士の結婚？」

多恵はうつむいたままそう小さな声で言った。姉の顔を見ることができなかった。光子は驚いた。

「誰がたらんもん同士なんて、酷いことを言ったの？ 酷い！……」

「おトメさん」

多恵は咲子が胃潰瘍で入院した時、病室のドア越しに聞いたトメの話や姉に語った。トメはおしゃべりでおせっかいな村の老婆だった。たしかに多恵に健全な男性との結婚は無理かもしれない、それでも母親の咲子に向かって他人のトメが、そこまであからさまな言葉を使うなど、光子にはその神経が信じられなかった。

そういえば光子はまだ自分が子供だったころの出来事を思い出した。トメが野良仕事をしていて咲子のそばにわざわざやってきて、「あんたに信心が足りないから、多恵ちゃんがあんなふうになつたんだよ」と言い、母親を泣かせたことがあった。ひどい人だと光子は幼い日のその風景を頭のどこかに止めていた。そのときはただ母親を泣かせたトメを憎んだが、それがまた世間だった。

病室でのトメの勧めに咲子がどんな返事をしたのか多恵は知らなかった。その後、すぐドアから離れてしまったからだ。咲子が退院してきてきた後も、多恵の結婚話が持ち出されることはなかった。

多恵は普段から父親との関わり合いはよく話題にのせたが、母親とのことは多くを語らない。光子の家に手伝いにきてからもそうだった。姉は多恵が母親に反抗的なものもそして憎んでいるのも知っていた。しつけの厳しさに対する娘の反抗ばかりでないことも知っていた。

だけではない、光子は母親の苦悩も知っていた。光子は長女である。善しにつけ悪しきにつけ母親の感情の動きには敏感だった。いつの日だったのだろうか。昭和二十数年ころだったと記憶していた。光子はそのころまだ未婚で家にいた。

……女にとって結婚は辛いことが多いものだよ。さまざまの意味で釣り合いがとれて結婚したとしてもね。夫の子供を何人も生んで、身を粉にして家のために働いたとしても、婚家の人間として認めてもらえないにはそりや何十年もかかるんだよ。生活していたらいろいろなことがあるよ、いいことばかりじゃない。家族の誰かが病気をしたり怪我が続いたり破産したりなんて災難がつづいたりしたら、それがまるで嫁のせいになさねないのさ。あの嫁がきてからうちにはろくなことがないなんてね……それでも女はいずれ嫁にいかないと世間から取り残されて笑いのものにされる、まったくこの世は大変だ。多恵の行き先が心配だね……

と、咲子はこの内容の話を光子に話したことがあった。

咲子は結婚という現実を自分の越し方に重ね合わせて言ったのかもしれない。それにしても、彼女は多恵を手放し、他人の手の中にゆだねるのが心配でたまらなかったのだろう。しかしそれを言ってみたら多恵の気がおさまるはずもなかった。言葉はなんの意味も成さない時がある。あまりにも辛い現実の前で、そうである。

光子はトメの話が出てしまっただけで、さらには多恵に結婚を勧めてみようという気がくじかれてしまった。沈黙は静かに流れて、美保の健やかな寝息が姉妹を包む空気を優しくしてくれた。

多恵は光子のお産とその後の世話で、お産が送れたこともあり初めの予定からずいぶん遅れて家に戻ることになった。二週間の予定が四週間になっていた。それでも多恵は迷惑ではなかった。むしろ、一日でも長く光子の生んだ赤ん坊と一緒にいるのが嬉しかった。

自分によく似たこの幼い姪は、なぜか自分の分身か生まれ変わりのような気さえしてくるのだった。そしていとおしかった。こんなに子供が可愛いと思ったのは初めてだった。赤ん坊は多恵にかすかな希望を与えてくれた。

多恵は実家に帰ろうと汽車に乗った。すでに稲刈りを終えた田んぼでは切り株が夕陽を受けて金色に輝いていた。たった一月の間に季節はすっかり変わろうとしていた。そして多恵の心もまた変わろうとしていた。

彼女は結婚への夢をまったく捨てたわけではなかったが、また反対に必ず結婚したいとも思わなかった。おトメばあさんがいう「たらんもん同士」という選択も、冷静に考えれば受け入れられないことではないかもしれないと思えるようになった。二週間前までのかたくなな気持ちと和らいでいた。美保の誕生が多恵を変えた。

多恵が駅の改札口を出たところで意外な人に会った。むつ子であった。二人ともお互い相手を認めた瞬間、「あっ！」と小さく叫んだ。久しぶりだった。むつ子はたしか三年前に良縁を得て他県に嫁いだはずだった。

そのむつ子が夫の女遊びに我慢がでえず、実家に戻っているというウワサを聞いたのはつい一、二ヶ月前のことだった。多恵とむつ子の間はその後とりたて悪くはなかったが、親しいということもなかった。二人はそこで立ち話をして別れた。女の幸せも不幸もどこに転がっているのか知れたものではないと多恵は思った。

むつ子は多恵が訊きもしないのに、夫は結婚前から付き合っていた女がおり、それが結婚後も続いて自分を苦しめたといった。むつ子が女と手を切らない夫をなじると姑ができて、嫁の気性が荒いから男の心が外に向くのだと言って反対に息子をかばい、むつ子を実家にかえしてしまったという。

彼女には一歳になる息子がいたが、その子は家の跡取りにするのだといって、婚家が手放さなかったらしい。引き取ってみたところで、子供を養育するだけの経済力もないのでどうすることもできなかったと、むつ子はやや自嘲気味に短い身の上話の最後を締めくくった。多恵はただ、頷きながら彼女の話を聞いた。

むつ子と別れて一人になった多恵は家への道を歩きながら、これからは姉の産んだ美保を自分はきつと可愛がるのだろうと思った。光子がもし風邪を引いたり体調をこわしたりして人手が必要になったら、いつでも飛んでいって美保の面倒をみてやろうと思うのだった。

美保を愛しそして母親の咲子を許すことができたなら、自分はどんなにいまの心の呪縛から開放されるのだろうかと思像してみた。だが芽生えたばかりの美保への愛情はゆるぎなかったが、母親への感情はまた別のものだった。多恵の苦難の道はそう簡単に越えられそうもなかった。彼女は自分が家族を愛し、たとえ不自由な身体であったとしても、卑屈にならず生きてゆきたいと思うのだった。

むつ子と立ち話をしたのはほんのわずかな時間と思っていたのだが、気がついてみると陽は西に傾き始めていた。彼女は家路を急いだ。すると、どこからともなく、いつぞやの夜に聞いた笛の音が聞こえてくるのだった。

そういえば、多恵はこの春から山のお寺に新しい和尚さんがやってきたと、祖母と母親が話していたのを思い出した。なるほど確かにこの笛の音も同じ方角から聞こえてきてい

た。

……誰が吹いているのだろう、和尚さんなのかしら。和尚さんならきっと年寄りなのだろう……多恵はそう想像してみた。

しかししばらく聞き入っていると嫋嫋とした笛の音色は、多恵が想像する年老いた和尚さんが吹いているようには聞こえなかった。繊細な感情の機微を複雑に織りこんだ深い思いを切々と訴えているように聞こえるのだった。

ともすると笛手は女性ではないかとさえ思えるほどに、細く長く悲しく響くかと思えば、わびともさびとも分らない、いぶし銀のような抑えた音色を響かせる。どんな人が吹いているのだろう、多恵は興味をそそられた。

会って見たい、多恵の足は無意識のうちに山のほうに向いていた。彼女は山門をくぐる和本堂へは石段を避けて、自然林の続くなだらかな坂道を選んだ。そして本堂の縁で背を正して静かに横笛を吹き続ける和尚は、多恵が想像したよりずっと若く見えた。四十をすぎたあたりだろうか。端然とした姿で吹き続けていた。

彼は人の気配を感じて静かに笛を膝の上へと下した。そして多恵を見とめてかすかに微笑んだように見えた。そして彼は多恵に向かって近くに来るように手招きするのだった。多恵は一礼した。そして側に近づくと彼は多恵が山に登ってくるのが見えていたと言った。「まさか！」と驚く彼女に、目で見えたのではなく心に映ったのだと言った。それを聞いて多恵はさらに驚いた。

和尚は多恵に縁に上がって一緒に座することを勧めた。彼女は自分は足が不自由なので正座ができないのだと答えた。答えながら、体の事情を素直に述べている自分に我ながら驚いていた。いままでそんなことは一度もなかったからだ。これまでの多恵ならにも言わず、和尚の勧めを辞退してその場を静かに去ったはずだった。

それから多恵は縁に腰を下した。彼に乞われたわけでもないのに、自分の胸の内をどうとうと語り始めるのだった。こんなことは彼女には初めての経験だった。和尚は静かにただ黙って聴いていた。

時間は山の自然に溶け込んでいた。多恵がふと我にかえた。あたりは暮れなずんでいった。彼女は不思議と自分の体と心が軽くなっているのに気づくのだった。丁寧にいとまを告げる多恵に和尚は、「またいつでもいらっしゃい」と言ってくれた。多恵もこくりと頷き、きつとそう思うだろうと思うのだった。

多恵の心は開放感と幸福感に包まれていた。いままで経験したことのない平安で豊かな感情を味わっていた。彼女はこれまで特別信仰心に篤いというわけではなかった、むしろ、自分の身の上をのろったくらいだった、神も仏もあるものかと。

二十三歳の彼女は今ある意味、新しい人生の一步を踏み出したのかもしれない。これからも彼女の茨の道は続くだろう。封建社会の名残の古い意識に支配された人間たちは、なぜか区別と差別を好んで混同させて弱い立場の人間をいじめたがるものだ。

多恵はそんな社会の中でこれからも生きてゆかなければならない。身体に障害を持っているからといって、それは彼女が犯した罪ではないのだ。胸を張って一人の人間として生きて行かなければならない、多恵は心にそう強く思うのだった。